

## 2024年6月9日聖霊降臨後第3主日説教

創世記3章8－21節

コリントの信徒への手紙二4章13－18節

マルコによる福音書3章20－35節

聖霊降臨後の節も第3となりました。本格的に福音書の物語に入り始めましたので、本日は福音書から学びたいと思います。最初に本日の箇所が含まれる3章について考えてみますと、3章6節で「ファリサイ派の人々は出て行き、すぐにヘロデ党の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談を始めた」と、ユダヤの宗教的・政治的指導者たちが、イエス様に対して殺意を持つことが明示されます。それに対して、「イエスは弟子たちと共に湖の方へ退かれた。ガリラヤか来たおびたしい群衆が付いて行った。また、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺りからも、おびたしい群衆が、イエスのしておられることを残らず聞いて、御もとに来た」（マルコ3:7-8）とあり、イエス様は、群衆に人気があり、彼らが従っていたことが示されます。イエス様は、宗教的・政治的指導者には殺意を持たれたが、群衆には人気があったと描かれているのです。

そのような人間界？の物語の展開の中で、「汚れた霊どもは、イエスを見るとひれ伏して、『あなたは神の子だ』と叫んだ」（マルコ3:11）とある通り、イエス様が「神の子」であることが、汚れた霊を通して示されます。それは、マルコによる福音書という物語の中で、イエス様が「神の子」であると示される4または3か所の一つです（1章1節は底本に「神の子」があるとする説の時4、ないとする説の時3であるため）。それらの描写の後に、十二使徒の任命のお話が続きます（マルコ3:13-19）。イエス様に従う多くの人たち、その中の弟子たち、その弟子たちの中の十二人と、イエス様により近い人々が確定していきます。そして、本日の箇所となります。

本日の箇所では、十二人の活躍は描かれていませんが、20節に「イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同（彼ら）は食事をする暇もないほどであった」とあり、十二人がイエス様と一緒に活動していたことが暗示されます。そして本日の話の中心に入りますが、そこに描かれている内容は、イエス様への批判です。「家」がどこかは明確ではありませんが、おそらくカファルナウムにあるシモンとアンデレの家でしょう。

最初に、「身内の人たちはイエスのことを聞いて、取り押さえに来た。『気が変になっている』と思ったからである」とあり、「身内」（直訳では周囲の人々）から、イエス様は正常さを失っていると思われていたことが告げられます。おそらくイエス様の親戚である人々が、様々なうわさを聞き、とりあえずやめさせようとやって来たのでしょう。イエス様を批判するのは、ガリラヤのナザレの身内・親戚の人々だけではありません。「エルサレムから下って来た律法学者たちも、『あの男はベルゼブルに取りつかれている』と言い、また、『悪霊の頭力で悪霊を追い出している』と言っていた」（マルコ3:22）とあります。「エルサレムから下って来た律法学者」という表現は、3章6節にある「ファリサイ派」と同じかもしれませんが、とくに律法を専門的に学ぶという人々です。

その意味ではより専門性の高い宗教的権威者です。彼らもイエス様の言動について、判別しに来たのです。その判断は、「悪霊の頭による」というものでした。

これらの批判に対して、イエス様は批判する「彼ら」（おそらく律法学者と身内の者）に対して、23節から29節で反論を述べます。そこで主張されていることは、「悪霊を追い出す」という、苦しむ人を救い・癒す行為を、誰の権威でそれを行ったかだけで判断し、そこで起こる苦しむ人の救済について関心を寄せないことへの批判です。なぜならば、悪霊を追い出す行為は、イエス様のご自身の能力ではなく、主なる神様の聖霊の働きによる事柄であるからです。その行為が聖霊によるものであるからこそ、それを冒瀆することは赦されないのです（その前に、人間のどんな過ちは赦されると主張されている点も重要ですが）。マルコによる福音書という物語においては、イエス様であっても主なる神様の聖霊の力によって奇跡をおこなっているのです。それは、奇跡やそれを起こす力を信じるのではなく、その背後にある主なる神様の愛を信じるのが、大切だからです。

これらを受けて、31節から35節の「イエスの母、きょうだい」のお話が続きます。身内や権威者たちの説得に応じないので、ついに母親の登場というところでしょうか。イエス様はその説得にも応じることなく、「**周りに座っている人々を見回して言われた。『見なさい。ここに私の母、私のきょうだいがいる。神の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ』**」と語るのです。

宗教的・政治的権威者、身内、母親・きょうだいの批判を受けても、イエス様は、「神の御心」を行うことの重要性を告げます。「神の御心」とは「神の意志」です。そしてそうであるがゆえに、これは軽々しく用いる言葉ではありません。自分の欲すること、実行したいことを、「神の御心・意志です」と述べることはよくないことです。自分が正しいと思うこと、賛成できることを「神の御心・意志」と判断することも同じです（その反対が律法学者の判断です）。イエス様がここで述べる「神の意志」とは、イエス様が悪霊を追い出したように、主なる神様の聖霊の力に支えられた出来事のことです。イエス様が「**誰でも**」と表現する通り、現代でも、聖霊を通して主なる神様の働きを担っている人は、イエス様の「兄弟・姉妹、母」なのです。もちろん、そのように考えても、「神の御心・意思」が、何かを明確にすることも、実行することも困難です。しかし、だからこそ教会があるのです。

イエス様を通して教会に集められるわたしたちは、礼拝を通して『聖書』から学び、心を合わせて祈ることを通して、「神の御心・意志」を見出すことができます。教会はその意味において、イエス様の「きょうだい」なのです。また、だからその歩みに聖霊が働くのです。そして、政治団体や活動団体とは異なる歩みが生まれるのです。世界中の教会が、そのように歩みを始めるとき、世界は聖霊によって変わっていくと思います。しかし残念ながら、教会は、二千年の時を経ても、一致した礼拝というような歩みすらも、満足にできないのが現状です。それでもわたしたちは、日本という教会の歴史の浅い風土の上にあるからこそ、また様々な立場を受け入れようとする聖公会という教派に属しているからこそ、その歩みをもっともよい形で具体化できる可能性を持っています。その可能性を持つ教会の一つとして、これからも歩み続けたいと思います。